

## 続・南蛮の風紀行 長崎編一

### あこがれとかなしみの色

長崎のまちを包む空気は世界中でここにしかありません。また、日本中のどこを探しても長崎と同じ空気には出会いません。この空気がどこから来るのか、わたしはこのまちを訪れるたびに考えてきました。そして、ひとつの結論に行きました。このまちに流れる空気には数えきれないほど多くの人々の憧れと哀しみ、さらには遥かな故国を想う郷愁が緋い交ぜに混合されているのだ。そのことに気が付いたのです。

一昨年、わたしはザビエルとアルメイダゆかりの地を訪ねてイベリア半島を旅し、そのときの感想を「南蛮の風紀行」としてまとめてみました。その時の旅のテーマのひとつが「中世から近世への橋渡しの時期、たかだか1世紀にも満たない短い間に3万余の殉教者を作り出すほどの信仰が、なぜこの日本に根付いたのか」という疑問の解決でした。疑問は疑問を呼び、解決の糸口を見つけることはできませんでした。その上、地中海を挟んで、それも東西南北四分五裂を呈してのキリスト教とイスラム教のせめぎあいの火勢がまして、背中をあぶられるような思いで帰国しました。その後、テロ組織ISの登場によって、事態は地中海から全世界へと飛び火しています。

昨年、長崎の明治日本の産業革命と近代化遺産が「世界遺産」に登録されました。一方でキリシタン南蛮宗教関連遺産の方は申請そのものが持ち越されてしまいました。世界の現状を見る限りキリスト教に特化した遺産申請はあきらめざるを得ないのかもしれませんが、わたしの心には忸怩たる思いが残りました。ただ、申請準備をしたことでこれ以上遺物や史跡、資料が散逸する危険性は当面無くなったであろうことが救いです。



復元された出島の正門、司馬氏の言う鎖国という暗箱に開いた、ここがそのピンホールであり、当時の日本人にとってここから世界が見えていたのです。



日本26聖人殉教地は17世紀初頭の惨劇でしたが、実は明治初年までキリスト教徒迫害は続いていたのです。禁教令が解かれるのは明治6年になってからです。

さて、長崎に漂う風の要素を分析してみると五つの色が見えて来ます。一つ目の色はもちろん、ザビエルやアルメイダの登場する「キリシタン」です。キリスト教の伝来から普及の時代、迫害と潜伏信徒時代、明治の禁教令廃止からの隠れキリシタンの時代、繰り返します禁教令廃止からの隠れキリシタンの時代、時の変遷とともに長崎のキリスト教信仰とそれのもたらした独特の文化の色です。

二つ目は鎖国時代の長崎の役割です。司馬遼太郎は「この国のかたち」の中で、江戸の鎖国政策下の



ランタンフェスティバルの会場でもある孔子廟の屋根には魔よけの怪獣たちが乗っています。

日本をひとつの暗箱に例え、長崎をその暗箱に開いた小さなピンホールだと表現しました。その小さな小さな穴から外を見ようとした日本人たち、そこから差し込んでいたであろう光、出島に押し込められて故郷に思いを馳せていたであろうオランダ人や奴隷たちの色です。

三つめは華僑たちの心の色です。華僑と呼ばれる人々が生まれたきっかけが、昔々の中国国内の戦乱や迫害にあったことは容易に想像できますが、それでも彼らの遙か地平線の向こうを見通す進取の意思と、異国にあつて常に故国を想う愁いを秘めた団結心と、その両面をわたしは「長崎ランタンフェス

ティバル」の装飾に強く感じてしまいます。

四つ目は明治の近代国家建設への日本人の力です。近代国家建設のその強い意志は、やがて暴走をはじめ、この地に落とされた原爆を最後に一度は瓦解しました。しかし、戦後の復興期のこの国の再建への思いの強さもまた、明治期のそれに匹敵もし、凌駕もしていたのではないのでしょうか。



三菱長崎造船所のシンボル、世界遺産のジャイアント・カンチレバークレーンと、その向こうに見えるのは戦艦武蔵が生まれた第2ドックです。



爆心地に建立されている母子像をわたしは勝手に1945年のピエタと呼んでいます。穏やかに子ども抱いたこの美しい母親の裳裾には炎のバラが散りばめられて、この母子のさらされていた運命と二人に代表される幾多の母子の冥福を祈る思いを強く感じさせる像です。

五つ目の色はもちろん、日本に落とされた人類史上最悪の殺人兵器、この地に

落とされたプルトニウム型原子爆弾によって引き起こされた言語道断の悲劇です。江戸時代を通して発覚すれば首が飛ぶキリスト教を守り通した人々の上に、同じキリスト教徒によって原爆は落とされました。長崎がキリスト教徒にとってのソドムであったはずはありません。それでもそこがソドムであるかのような仕打ちを受けたのです。正直言うと、わたしは長崎原爆資料館には一度にしか行っていません。その一度の経験すら、強いトラウマになってわたしの心を驚掴みにしたままなのです。

この五つの色が混じり合って、長崎の独特の風の色になっているのではないのでしょうか。それをわたしは「あこがれとかなしみの色」と名付けたいと思います。そして、これからわたしの感想を少しばかり詳しく書いてみたいと思います。